

第17回 大賞(金の星賞)受賞作品

「知恵の神さま」

北海道標茶高等学校三年 高橋 璃来



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



大賞 〈金の星賞〉

『知恵の神さま』

北海道 標茶高等学校三年 高橋璃来

中三の夏休みにはじかに遊びに行きたないと母に愚痴ぐちつた」とがある。受験生の私にぴったりの勉強できるところがある。と言われた時には断る隙すきなんてなく一週間田舎いなかのおばあちゃん家にお泊りが決定していた。

ゆりゆりと何時間も列車にゆられやつと田的の駅に着く。おかげでお尻しりが痛い。

降りると、予想した熱氣はなく少しひんやりしており、まつんとじんまりした駅が出迎えてくれた。

「レナちゃんお久しぶり。何時間も疲れたでしょ、ほりほり町へ車に乗りなれい」

優しい笑顔のおばあちゃんが駅の中からひょいり顔を出し、手招きをしていた。

わざわざ車で出迎えてくれるなんて優しいなと思つていたが、おばあちゃんの家は随分すこぶんと田奥いなかで、これから私は修行でもするのかと思つぽい奥おくまで来た。

するともなくもう見飽きた外を見るしかない。草原が広がり所々に牛が放し飼はなづいでいるのをぼんやり見つめる。

「おやまあ」

のんびりとした声とともにブレーキがかかり私は勢いで前の席に鼻をぶつけた。

「レナちゃん大丈夫? タンチョウウが飛び出してきたから急ブレーキをかけちゃったわ」

痛む鼻を押さへ、そのタンチョウウと戯戯のぞむのを見たため外を睨にらみ付けながら覗のぞいてゐる。



が、そこにはモデルみたいに細くて、きれいな白い鳥が真っ赤な頭を振りながら優雅に歩いていたのだ。

ツルと言われればわかつたが、こんなにも図鑑で見たものと実際に見たものが違うだなんて思わなかつた。

こんな田舎に楽しみなんてないと思つていたがきれいな物を見ると嬉^{うれ}しくなる。

道なりに進んでいた車が速度を落とし、脇道に入る。そこは「コンクリートではなく砂利道で、車と一緒に体もがたがたと揺れる。

おばあちゃんの家も牛を飼つてゐるためかどんどん山奥に入つていく。

「あらまあ」

またもやおばあちゃんの、のんびりした声とともに車が止まる。

今回のブレーキには耐えた。ソリで乗り物が止まるのは動物が出ていくからだと思ひ前の席へと身を乗り出す。もしかしたらまた、タンチョウかもしない。

すると、茶色い地味な色の鳥が飛び立つのが見えた。羽^はこそ大きいものの、タンチョウのよくなスタイルのよさはない。色もぱつとしないし、期待した分がつかりしてしまつ。

「あら、シマフクロウじゃないから。絶滅^{絶滅}危惧^{きぐ}種で珍^{めず}らしいのよ。家の近くで見られるなんて思わなかつたわ。レナちゃんにはぴつたりの鳥よ。良かつたわねえ」

おばあちゃんはタンチョウのときより嬉しそうにしていたが、私からしてみればただの地味な鳥にしか思えなかつた。

そりにはぴつたりと言われる始末だ。私が地味といつゝことだのうか。

勝手に期待しといてシマフクロウには悪いが見られた嬉しさはない。

ふと、林の中の何かが田に入る。その一帯だけ草が生じ茂つておひず、薄暗い林の中にぼくぼくとした何かが密集していたのだ。

薄気味悪くてすぐに視線を母達の方へもどす。家につくまで何となく外を見ることができなかつた。

晩御飯は大好きなカレーだったが、こんな何もない所では一週間勉強漬けだろうと思つと気持ちが沈んでしまう。カレーをちびちびと食べていろると、



「女中学生のレナには、こんな田舎娘だべ。そんなレナに、こと教えてやつが？」

なまりのきいた大きな声で台所からカレーを持ったおじいちゃんが出てくる。

レナの横にあぐらをかき、気にならだらう氣にならだらうと、期待に満ちた視線を送つてきたので、渋々何なのか聞いてみた。

「んんー？ やつぱ知りたいべか。仕方ないから特別に教えてやるべよ。実はなーの家の近くにはな、知恵の神様がいてな、神様が持つてる宝物に頭を良くする力があるんだべよ」

笑顔でいるから何かと思えど、迷信のような話をしてきた。

「おじいちゃん、私確かに中三で受験生だけどそんな話信じないよ」
あきれ顔でおじいちゃんを見たが、本気にするとは最初から思つていなかつたのだろう。からかうような笑顔を向けながらカレーを頬張つていた。
「まあ、おじいさんつたりまたそんないと、でもね、レナちゃんあまり深い森に行つては駄目よ。

特にヤチボウズがいるといひはね」

「ヤチボウズ？」

「家に来る途中にもあるのよ。本当は草が積み重なつたものなのだけどね、沢山あつて地面がぼくぼく見えるのよ。」

ああ、あの薄氣味悪いやつだ、とすぐわかつた。どうやら、ヤチボウズと言つらしき。

「ヤチボウズ自体は可愛いのだけどね。とにかく恐い神さまだつているんだから。会つても絶対口を合わせちゃ駄目よ。連れて行かれちゃうわ」
あまりにもおばあちゃんが真剣に言つてやるものだからおじいちゃんの話も冗談に聞こえなくなつてしまつた。

だが、わざわざ探しに行く気なんてなかつたので私には関係のない話だと思いその話はそこで終わつた。

その後の六日間は平和にのんびりと田舎の生活を送つた。勉強もそりそりに遅いインターネットで暇をつぶす。しかし、寝返りをうつただけで窓外になつてしまつおかげで、左半身が痛い。



でも、そんな中で一つ楽しみができたのだ。袋上州に今田も家の裏にスキップで行ってみる。

すると、遠くにいた「羽の大きな白い鳥が赤い頭をひょいひょいと飛びながら寄つてくる。

最初に来たときに、タンチョウにひとぬぼれしたとおばあちゃんに書つたといふ笑顔で家の裏に連れて行かれたときはどうなるかと思つたが、趣味で餌をあげてこねとは驚いた。

今ではおばあちゃんの代わりに餌をあげるとしている。

「ほりほり、ドヤんだよ」

餌のとくもりのしを地面にまく。野生なので触つたりはできないが、こんなに近くで見られるだけすげこと思つ。

私も近くに腰を下ろし、もう一つの袋からおむね一本とくもりのしを出す。あまりにもタンチョウが美味しいやつに食べていたのでお母さんに茹でてもらつたのだ。

最初の頃、タンチョウにあげているのをいつも食べたが人間用ではないうしく、乾燥していてしかも味がなかつた。すぐに吐き出し草むらに証拠を隠したのは秘密だ。

今朝茹でたばかりのとくもりのしは手の上で跳ねさせていないう持てないくらい熱くて今食べるのはこつたんあきりぬいことにした。

ふと、タンチョウの方を見ると食べ終わつたのか、わらを見つめている。「そんな田で見てもだめだよ。」れ以上あげたら私が怒りやうんだから。」おかしいな、と頭をかしげる。こつもなり食べたりすげどりかに行つてしまつ子たちなのに。

すると、タンチョウたちが歩き出す。今田も見送りのへと思つたのに少し歩くといふかぎりを振り返り止まつてしまつた。

まるでつづてここと書いてこねに見えてしまつ。

そんなこと現実にはありえない」とだと頭ではわかつてゐるけれど確かめるように一歩また一歩と踏み出す。

するとタンチョウたちはまた歩きだした。そしてまたかぎりをつかがつようになつたのだ。



予感が確信に変わり、恐る恐るつじつじとしたが、だんだん頭がぼんやりしてきた。

ひたすら黙って「行かれないとだけ考えタンチョウたちを追いかけていたが。

「あつ……」

ついもれた自分の情けない声と大きな羽音によつてはつと我に返る。
一羽のタンチョウが飛び立ち、空へと消えて行くのが見える。慌てて追いかけるが空を飛ぶ鳥に追いつける訳がなく疲れて立ち止まつてしまつ。そこでふと、足が思うように動かないことに気がついた。

地面は雨が降つた直後のようにぬかるんでいた。長靴を履いていたので助かつたが、いつもの靴なら今頃中まで水浸しだ。

そこで初めて辺りをゆっくりと見渡す。草は生い茂り、地面は妙に水っぽい。そして辺り一面には霧がかかっている。

ぼんやりした頭で歩いたから帰り道なんて覚えてないし、スマホなんて持つてくる余裕なんてなかつた。

電波だつてきつとないだろ、私の左半身が証拠だ。

「あのタンチョウたちめ、ちょっと綺麗だからって調子乗つて今度あつたら鳥鍋にしてやるんだから」

「こに来ていきなりサバイバル生活になりそ�で、あんなに可愛がつていたタンチョウたちにせえ怒りが湧く。

怒りのおかげで今のところ不安はないが早く帰りたい。

辺りに何かないかと見まわしていると草むらがきりりと光つた。特に何も考えず近づいてみる。

手を伸ばし一歩足を踏み込んだ、瞬間、

「そつちは駄目だ！」

突然、大きな声と強い力によつて引きもどされた。

慌てて振り向くと私と同じくらいの男の子がいる。右手には杖を持つていて変わつた和服みたいなのを着てゐる。ちょっと不思議だけど、ふわふわの茶色の髪の毛に、優しげな顔。とてもいい人そくに見える。

「お前、棒も持たずに歩いてバカだろ。危うくヤチマナコに入るとこだつたぞ。死にたいならもう止めないけどな」



わつも思つたとてもじこ人そつこ見べるところのは無しにしよつ。全然い
い人そつじやない。

「こきなりひつぱつとこてなんのよ、じんなどりで死ぬわけないじやな
い。あと、ナマコがどうかしたの?」

「ヤチマナ「だー、ナマコ」と一緒にすくな。せり、わつもお前が入りそつに
なつたと」じだよ」

ヤチボウズの仲間だのうか。でも、わつも私がいた草むりに変わつたとい
ろなんてないはずだけど。

すると男の子はわつも私がいたといじるを持つていた枝で刺す。すると枝が
すくすくと地面に吸い込まれていぐ。

「ぱつと見は草が浮かんでいてわからぬけどな、じるの下は底なし沼なん
だ。馬とか牛でも逃げられないほど深くてな、お前なんてどんくわうだし
絶対助からぬぞ」

「これは私がバカと云われても仕方ない。そんな恐ろしきものがあるなんて
知らなかつた。タンチヨウの歯とここの度からはもつと考へて行動しないと。
「おい、いつまでそ」にこねんだ。じるはお前みたいなやつがいていいとい
ろじやないんだ。そり、枝でも拾つてさつやと帰りな」

「それが、その、じるに来るまでタンチヨウたちにひづて来たから歸つ道が
わからなくて……」

「タンチヨウたち? ああ、あのいたずら好きなやつらか。それにしたつて
なあ、帰り道を覚えていないなんてお前、やつぱりバカだろ」

「な」よさつきからバカバカつて! ひ、否定は出来ないけど。あと、私は
お前じやありません。レナつていうちゃんとした名前があるんだから」

つこむきになつて言ひ返したといひで、どりからか、ぐづーとお腹の音が
聞こえてきた。

男の子を見ると真つ赤になつて震えている。どりやら腹の音の主は私じゃ
なかつたらしき。仕返しに馬鹿にしてやむつしたが、なんだか男の子は少し
顔色が悪い。

ふと、私がちよつとじつ物を持つてこねいとこに気がせぐ。エーラー袋をあ
わつ、もつ冷め切つたとつもくいしを一つに割り半分をすこつと、男の子の
田の前に差し出す。



男の子は口惑ひながらも受け取り、一口食べるとすかに勢いで食べ始めた。私も遅れて食べたが冷めても甘くて美味しかった。

「とつきびつてこんなに甘くて美味しいんだな。」最近探し物のせいで食べる暇がなかつたんだ。まあ、その、助かつた。」

「いいよそれくらい。さつき助けてくれたお礼つて」とおあいこね。そんなことより何を探してんの?」

「うーん……」ここまで来たら言つてもいいか。俺の名前はフク。信じられないかもしないけど知恵の神になるために知恵の結晶を探しているんだまさか本当にいたなんて。普通の人では無さそうとは思つていたけどまさか神さまになる人だったとは。

「ねえ、もしフクが知恵の神さまになつたら私の家までの帰り道とかわかる?」

「別に神さまになつたからつていきなり頭がよくなるわけじゃないぞ。神さまと認められるだけだ。帰り道はあのタンチヨウたちを探せば問題ないだろう。仕方ないから手伝つてやるよ」

「じゃあ、私も知恵の結晶探し手伝うね」

結晶と書くよりも宝石みたいに光つてゐるなり呪つけやすいな、と考えていたといふで思い出した。

私がヤチマナコと知らずに近づいた草むらに光る物があつたことを。フクに伝えると、慌てて杖で草むらをかき分け始めた。すると、見つけたらしく杖で引き寄せた。

「ん? これは知恵の結晶じゃないな。鏡だ」

泥を落とすと裏面が木彫りになつていてなかなか汚い。一応女子なんだからどうつてのわからない理由で私が持つことになつた。

それからは私も棒を持つて探し始めたが、どれくらいの大きさかもわからず、闇雲に探しても見つからなそうだ。

ふと、冷たい風が吹く。どうやら近くの森からきたらしく。涼もうかと森を覗いてみる。



なんと、そこにはヤチボウズが沢山あった。間違ひなくおばあちゃんが言つていた森に違ひない。まだ明るいのに森の中だけ薄暗く冷たい風が吹いていて氣味が悪い。

「これだけこの周りを探してもないなり、」の森の中におつてもおかしくはないように思つ。

振り返つてフクを見る。泥にまみれながらもいまだに探し続けていた。あんなに頑張つてゐるのだからどうにかして見つけてあげたい。

私はフクに気づかれないように森の中に入つて行く。地面がヤチボウズだらけで歩きにくいくらいがどんどん進む。

そして、何か大きな塊が見えてきた。近づいてみてぎょっとする。私の身長ぐらいの大きなヤチボウズがあつたのだ。

わすがに引き返そうとするが、巨大なヤチボウズの上に光る物が見えてしまつた。

もう「」今まで来たうどるしかない。覚悟を決めてよじ登り、手探りで確認する。

すると、何か冷たいものに触れる。掴むとそれは宝石みたいにきらきらとしている。喜ぶ間もなく、登つていたヤチボウズが揺れだした。

慌てて降りると、そこには大きな田があつた。しまつたと思つた時にはもう遅い。田が合つてしまつたのだ。

突如ヤチボウズから手にしきものが生え強い力で引かせられ込まれる。

「うらー！ まだバカなことしていい加減學習しろ！」

温かい手によつて引き戻される。フクだ。来てくれて安心したのもつかのまで、今度はフクが狙ねらわれ始める。

フクはすばしっこく、ヤチボウズの手を軽く避けていくが、今の疲れているフクでは逃げるので精一杯のようだ。どうにかして動きを止めたい。明らかにあの大きな田が弱点に見えるが攻撃できる暇がない。

せめて田くらましになる物でもと思つたがそんな都合のいい物が…… あつた。鏡だ。

光を反射させようとするが、「」は薄暗い森の奥だ。さうに霧のせいで全然光がない。



もう、どうしようもないかと思つた時、突然ヤチボウズが「ちりこに向かって来た。つい反射的に持つていた鏡を前に突き出す。すると、ヤチボウズは私ではなく鏡を掴む。

「よし、でかした！」

フクに手を引かれ森の出口まで全力疾走する。息を切らしフクと顔を見合わし、振り向く。どうやら、ついて来てないようだ。

「何で私じゃなくて鏡を取つていったんだろうね」

「きっと鏡の中の自分と田があつたんだな。気づかないでやつてたのか。」なるほど、私はそりまで考へていなかつたけどどうあえず助かつて良かつた。

フクが今にでも怒りそうなので誤魔化すように結晶を差し出す。ゆつぐりと受け取り大きくうなずく。どうやらこれが知恵の結晶で合つていねりしき。

「いいのか？ レナが見つけたのに」

「いいのいいの。フクあんなに探してたんだから。その代わり、タンチョウを探す約束忘れてないよね？」

すると後ろから服の端を引っ張られる。いつの間にかタンチョウがあり、早く帰ろうとも言いたげだ。

もうタンチョウに対する怒りは薄まつたので黙つてついていく。最後に小さな声で「ありがとう」と聞こえた。振り返るがもう誰もいなかつた。

七日目の朝。今日で帰つてしまつので最後の餌やりになつてしまつ。六日の冒険は短い夢のようで、最後にもつとフクと話したかつたな、と思つていると大きな影が飛んできた。

珍しい、フクロウだ。最初は地味だと思つていたけど何だかフクに似てて愛着がわく。

私が食べるためのとうもろこしをあげると美味しそうに食べ始めた。

「あら、フクロウがとうきびを食べるところなんて初めてみたわ」

「え、そなんだ。美味しいぞうに食べてゐるけどね。そういえばおばあちゃん最初に見た時、私にぴったりって言つてたよね」



「だつてレナちゃん受験生でしょ?」 フクロウは知恵や学問の神様と呼ばれているし縁起がいい鳥なのよ」

フクロウが普段食べないというものが、これを美味しそうに食べて、知恵の神。ある一人の男の子が思い浮かぶ。
「フク、何度も助けてくれてありがとう。お見送りまで来てくれて嬉しいよ」私は自信をもってフクロウに会って切ると、フクロウは満足そうに森へ飛び立つていった。